膵頭部癌の後方浸潤に関する病理学的検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹田, 利弥 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/15234

学位授与番号	医博甲第1146号
学位授与年月日	平成6年12月31日
氏　　名	竹　田　利　弥
学位論文題目	膵頭部癌の後方浸潤に関する病理学的検討
論文審査委員	主　査　教　授　宮　崎　逸　夫
	副　査　教　授　中　沼　安　二
	教　授　渡　邊　洋　宇

内容の要旨及び審査の結果の要旨

膵癌では後腹膜組織への腫瘍の進展がしばしば認められ，根治術をめざすうえで重要な問題点となっている。教室では，従来より膵癌において膵頭神経叢に神経浸潤が認められることに注目し，後腹膜郭清の重要性を強調してきた。しかし，神経浸潤をはじめ，静脈浸潤，リンパ管浸潤などを含めた膵後方浸潤の進展様式は十分には解明されていない。さらに，膵後方組織は上腸間膜動脈，門脈，下大静脈の重要血管を含んでおり，血管と癌浸潤の関係を解明することは膵癌外科治療上重要である。そこで，膵癌の膵後方組織内の進展様式を明らかにするために，膵後方浸潤を上腸間膜動脈，門脈，下大静脈に向かう3つの方向にわけ，病理組織学的検討ならびに三次元的検討を行った。

1987年9月から1992年3月までの膵頭部癌切除例21例を対象とし，得られた切除標本から上腸間膜動脈に垂直な5㎜間隔の全割切片を作製し，上腸間膜動脈，門脈，下大静脈方向における進展様式を検討した。また，4例に対して5μmの完全連続切片を3159枚作製し，三次元的に進展様式を検討した。なお，本研究では，線維性結合織の増生（desmoplasia）を伴った癌組織の浸潤（以下，線維形成浸潤と略す）の最外側部を腫瘍辺縁と定義した。得られた結果は以下のごとく要約される。

(1) 癌先進部と膵辺縁までの平均距離は，上腸間膜動脈方向では6.5㎜（範囲，1.6－17.6㎜），門脈方向では4.5㎜（0.6－11.4㎜），下大動脈方向では3.6㎜（1.2－11.0㎜）であった。

(2) 癌先進部と腫瘍辺縁までの平均距離は，上腸間膜動脈方向では3.9㎜（0－15.4㎜），門脈方向では0.8㎜（0－4.8㎜），下大静脈方向では0.9㎜（0－5.4㎜）であった。

(3) 癌先進部と各血管までの平均距離は，上腸間膜動脈方向では3.2㎜（0－13.2㎜），門脈方向では0.5㎜（0－2.0㎜），下大静脈方向では2.1㎜（0－4.8㎜）であった。

(4) 膵後方浸潤の進展様式は，上腸間膜動脈方向では神経浸潤が主体をなし，神経浸潤が上腸間膜動脈の近傍まで認められた。一方，門脈，下大静脈方向では線維形成浸潤が主体をなし，線維形成浸潤が門脈の近傍まで認められた。

以上より本研究は，膵癌の膵後方組織への進展様式を明らかにし，膵後方浸潤を認める膵頭部癌症例に対しては，根治性向上のため，門脈，上腸間膜動脈の合併切が必要であることを示した。すなわち本研究は膵癌の外科治療学上価値ある労作と認められた。